潮音寺だより

第 284 号
平成 19 年 6 月

電 話 052-671-4831
ファックス 052-671-4856
E-Mail:choonji@aichi.email.ne.jp
〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬 1 -10-11
〈ホームページ〉http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/

我が家かな

かたつむり
どこで死んでも

衣食足り
調度も揃う
我が家は
あれど

疲弊せし
我が心癒ゆ
住まい
ありしか

我が胸の中
み仏の座す
住まい
ありしか

ナメクジとカタツムリ

私どもの庭に、夜な夜なナメクジがたくさん出没します。外猫にあげた餌の残りなどがあると、佃煮したらよかろうと思うくらい群がっていることがあります。ただ、誰からもあまり好かれることのないナメクジではありますが、照りには弱いとみえ、巣に帰り損ねて、カラカラに干乾びて死んでいたりしていると、哀れに思えてきます。

一方、殻があるかないかで大違い、カタツムリは、ずいぶん得をしています。童謡や俳句にもたびたび登場し、梅雨時ともなれば、紫陽花とのツーショットの写真やイラストが定番のようにして使われます。しかも、殻があることで、乾燥に強く、寒さにも強く、越冬できるところから、ナメクジに比べ寿命も長いようです。

俳句では「かたつぶり そろそろ登れ 富士の山」（一茶）というのが有名ですが、「かたつむり どこで死んでも 我が家かな」（一茶？）も、なかなか味わい深いものがあります。この句には、なんとなく宗教味が感じられ、少々考察してみることにします。

ここで、カタツムリを「殻に閉じこもる」独りよがりな存在と解したのでは意味がありません。孔子は、「吾十有五にして学に志す（志学）、三十にして立つ（而立）、四十にして惑わず（不惑）、五十にして天命を知る（知命）、六十にして耳順う（耳順）、七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず（従心）」と、その一生を振り返り、さらには、「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」と、人生への気概、求道の心を述べられています。

つまり、カタツムリは、何年生きるか知りませんが、生まれながらに殻をすでに持っているところから、向上心ある覚悟を決めた求道者としてとらえるところに、この句に妙味が生まれます。

私ども、奇しくも人間として生を享けているにもかかわらず、ナメクジのような生き方しかできず、皆から嫌われ、干乾びて死んでいかねばならないとあっては、情けなく哀れです。カタツムリに学ぶ生き方というものを考えてみましょう。

釈尊のなまの言葉にいちばん近い文献とされる『法句経』に

おのれこそ　おのれのよるべ
おのれを措きて　誰によるべぞ

よくととのえし　おのれにこそ
まことえがたき　よるべをぞ獲ん
（一六〇番）

爾　おのれの燈となれ
すみやかにいそしみて
賢き者となるべし
けがれをはらい
著をはなれて
とうとき
聖地にいたるべし　（一三六番）

と（友松圓諦訳）、あります。

釈尊が亡くなられるとき、弟子の阿難に、「私がいなくとも、自らを灯明とし、法（真理）を灯明とせよ」と遺言されたといいます。仏教徒は、「自灯・法灯」という、二つのともし火を持て」というのです。灯明というのは、拠り所、寄る辺ということです。つまり、空・縁起の法を理解し、自己を確立して励むよう、諭されたのだと思います。

これを、自分自身のこととして考えてみますと、本来存在しなかった自分は、父母という縁を得て、現在の自分というものがあります。当たり前といえば、当たり前なこととして見過ごしてしまいそうですが、それであっては、学問も道徳も宗教も育ちません。

生まれてから現在に至るまで、父母、配偶者、教師、医師、友人、同僚、他、幾多の人々とのかかわりの中で、善いこともしたかもしれないが、罪深いこと、恥ずべきこともしてきた自分です。それらは、目に見えるもの、見えないものを含めて一切の縁起によって生かされてきたのだという意識、さらには、そういった人々、世間に借りがあるという意識を持つことが大切です。

そして、このような共々に生かされて、許されて生きているという自覚の中にこそ、他者に対する慈悲の心が生まれ、仏教徒としての心構えができるのです。

今日の自分は、昨日まいた種、因の結果です。明日の自分は、今日まく種、因の結果です。嬉しかったこと、悲しかったことが記憶として残るように、人の行為（業）は、善業・悪業として残ります。善因善果・悪因悪果、因果応報の教えは、正面から受け止めるべきです。

確かに、宿業や共業（環境世界、多くの人々の行為の力としての業）のように、自分だけではどうしようもないものもありますが、縁を大切にして、「自灯・法灯」、「どこで死んでも我が家」の心を持って生かさせていただきたいものです。

しゃり

すし屋の職人は、ご飯のことを隠語でこう呼ぶ。しかし、もともとは遺骨のことで、梵語のシャリーラがなまって「しゃり」に。漢字に直すと「舎利」。しかし、骨と米粒がどうして結びつくのか？　釈迦は死後、火葬に付されるのだが、そのときの骨は、小さな米粒のように細かく砕けたという伝説がある。要するに形状が似ていたからなのだ。しかし、古代のインドでも米粒のことをしゃりと読んでいたというから、この隠語は、かなり古い外来語といっていい。

「仏舎利」は、もちろん釈迦＝仏陀の骨のこと。それを祀るのが「舎利塔」。世界中の舎利塔に納まっている釈迦の骨をすべて集めると、象数頭分に達するという説もある。

ちなみに「砂利」ということばがある。小石、あるいは小石に砂の交じったものをいうが、これも形状はしゃりに似ているために生まれたことばだ。

（『仏教のことば』早わかり事典）

雑記

▼御忌会団参

さる4月24日、総本山禅林寺永観堂へ、総勢40名、法然上人御忌会団体参拝に行ってまいりました。

お陰と天候にも恵まれ、新緑かおる本山中門の前で記念撮影。

法要後、世界遺産の清水寺も、小学校の修学旅行以来という方も多く、有意義な参詣の旅の一日を過ごさせていただきました。

▼表紙

以前にも何度かご紹介した、鶴田偉子様作のパンフラワーです。当山本堂で撮影しました。

▼本文

今回の「ナメクジと…」は、少し念を入れてまとめさせていただきました。趣意を汲み取っていただければ幸いです。

▼スナップえんどう

70年代、米国から導入された品種とか。食感が楽しいですね。

◆小蕃茄　スナップ豌豆

皿小鉢　沐魚